

教育長賞

山田 千裕(やまだ ちひろ) 第四中 1年生

作品名:学べる幸せ

図 書:夜間中学へようこそ

「世界の果ての通学路」という番組を観たことがある。世界には水汲みや家畜の世話をし、朝まだ暗いうちから家を出発し、野生動物のいる草原や、危険な凍った山道を往復何時間もかけて学校に向かう子供達がいる。女に学問はいらないというお国柄でやっとの思いで就学を勝ち取り、猛勉強する女の子。何代目かわからないほどの制服や教科書を大切に抱える子供達。ある子は家もなく、ゴミの山で過酷な毎日を送り、学校に行けることだけを希望に生きている。彼らはきまって瞳がキラキラ輝き、将来何になりたいと大きな夢を持っている。そんな姿を見て胸が熱くなる一方で、何故か妬ましくなってしまう。私は衣食住に困ることなく、はるかに恵まれた環境にありながら学ぶことに少しずつ飽き、意欲も目標も失いかけている気がするのだ。

『夜間中学へようこそ』の七十六歳の幸さんも少女時代からずっと貧困と戦いながら、学びの機会を逃してきた。無知だった私は、明治に教育勅語が發布され義務教育が国民に次第に浸透し、学習の機会を与えた人々は全て読み書きできると思い込んでいた。実際には昭和の世まで次々と戦争が起き、学校に通えても軍国主義に偏った勉強と勤労奉仕ばかり押し付けられていた。戦中、戦後の混乱期、貧しい人々は生きるため懸命に働き、幼かった幸さんのように学校へ行けずじまいだった例も多いのだ。

そんな幸さんが一念発起して孫娘と同じ中学一年生となり、いそいそと学び直しを楽しむ姿が初々しい。息子からの嫌味や怪我にもめげず根気良く学校生活を貫く様子は立派だ。「今日は行きたくないな。」などと思わないのもさすがだ。中でも幸さんが自分の名前の由来を知る場面が感動的だった。幸福の幸と書いて「サチ」。音でしか知らなかった自分の名前だが、漢字を学んで名前に込められた親の願いを初めて知る。当時は生活に余裕がなく親の愛情を感じることもなかったが、「幸せに生きて欲しい」という温かな思いがしっかり伝わった。今、学ばなければ永遠に知り

得なかったし、人より時間がかかっても最高のプレゼントを受け取れたのでなによりだった。

夜間中学では義務教育を修了していない高齢者、家庭環境や不登校といったデリケートな問題により中学校で十分に学べなかった十五歳以上の人、また日本語を習得したい定住外国人の方のために、無料で授業を提供している。最近、八王子市議会だよりを読み、市内でも第五中学校の夜間学級で、外国人生徒等に対応した日本語学級開設の検討を求める請願が上がっていることを知った。コンビニエンスストア等も様々な国籍の店員さんが多い。もはや、外国出身の方々の労働力によって、我々の日常が支えられている。学のなさより、他者への無関心は恥ずべきことだ。世界の果てで不便な生活を強いられながらも真剣に学ぶ子供達や、幸さんの物語に学べる幸せを教わった。私も、彼らがずっと学び続けられるように願っている。

また近年私達の生活でスマートフォンやパソコンへの依存が高まり、漢字が書けなくなる傾向が見られる。便利さが人間の能力を蝕んでいるのかもしれない。水面下で日本人の識字率は危うくなっているのかもしれない。令和の時代は、このまま平和であって欲しいが何も起きない保証はない。誰もが安心して自由に学べる国、そう思われていた日本で学校から離れた人々を放っておけば、学びの貧困は一層深刻化するだろう。夜間中学の他にも、フリースクールやオンライン教育など個々の事情に合わせて学びの場は多様化しつつあるが、学ぶことの価値、共に学び助け合う仲間の大切さはいつまでも変わらないだろう。学校で学問以上に大切なことは社会性を身につけることだ。幸さんが字を覚えること以外に期待を寄せていたのが新しい出会いだ。未知の世界に触れ、学び、自分が変わっていくことを誰よりも実感したはずだ。境遇は様々でも向上心溢れる生徒たちが、お互いの学びを助け合い、己を高めている。

特に不登校などで一定期間、他人と関わらず過ごしていた人は、生活を立て直し人への信頼を取り戻す必要がある。他人によって負った心の傷は、また別の誰かとの温かい関わりによって癒えるものだ。学校は交流の場であり、特にぶつかり許しあう中で生まれる友情もある。社会に出るということは、人との関わりを避けては通れないのだ。夜間中学はコミュニケーションのリハビリの場になっている。他者を思いやり、自分を省み成長する。年齢・性別・国籍ひいてはお互いの個性を尊重し受け入れ、支えあいながらより良い社会の一員になる準備をする場所、未来に向かってあるべき学校の姿を夜間中学に感じた。